

農産FAX情報 第5号

令和8年7月15日
ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

1 秋まき小麦

○収穫適期の判定

- ・本年は乳熟期が6/27と平年より1日早く、成熟期は平年並（7/18）となることが予想されます。ほ場を観察し、仕上がりの早いほ場から収穫を行いましょう。

○収穫作業の留意事項

- ・コムギ縞萎縮病の拡大を防ぐため、未発生ほ場を優先して収穫しましょう。発生ほ場から未発生ほ場に移動する際は、作業機を洗浄しましょう。

2 ばれいしょ

○疫病、夏疫病の防除

- ・疫病は18~20℃・降雨等による多湿条件、夏疫病は26℃前後で活発になります。天候の変化に注意し、予防的な防除を行いましょう。
- ・小麦収穫作業との競合や降雨が予想される場合は、ダブルインターバル薬剤（防除間隔14日間）を活用しましょう（FAX情報第3号）。

○軟腐病の防除

- ・本病は高温多湿条件で発生しやすく、倒伏等で茎葉が傷つくと発生が助長されます。気象経過・茎葉の状況に合わせて防除を行いましょう。

3 てんさい

○褐斑病の防除

- ・褐斑病は高温多湿で発生が多くなります。
- ・マンゼブ剤を主体とした防除を実施しましょう。また、散布間隔は14日以下とし、上記の高温多湿条件となった場合は10日以下で防除しましょう。

○ヨトウガ、シロオビノメイガ

- ・ヨトウガは、ほ場状況を確認し防除を行ってください。
- ・シロオビノメイガは飛来性の害虫で、年次によって飛来時期や量が異なりますが、本年はまだ確認されていないため、ほ場を観察し、発生を確認した場合は薬剤散布を行いましょう。

4 豆類

○ノメイガ類の防除

- ・アズキノメイガは7月中旬以降から発生が始まります。
- ・マメノメイガは飛来性の害虫で、年次によって飛来時期や量が異なるため、ほ場を観察し、発生を確認した場合は薬剤散布を行いましょう。また、マメノメイガは小豆の花芽に産卵し加害します。急速に成長し発生が拡大し被害が多くなるため、散布時期を逃さないようにしましょう（表2）。

表2 ノメイガ類の防除例(小豆)

薬剤名	系統名	希釈倍率(倍)	使用回数	使用時期	RAC番号
ディアナSC※	スピノシン	5,000	2	前日	5
プレバソフアブル5※	ジアミド	4,000	2	7日前まで	28
カスケード乳剤	IGR	4,000	2	7日前まで	15
グレーシア乳剤	イタリザリン	3,000	2	14日前まで	30

※浸透移行性があり、莢に潜った幼虫にも効果がある。

○菌核病、炭疽病、灰色かび病の防除

- ・小豆、菜豆の灰色かび病1回目の防除開始目安は開花1週間後です。その後7~10日おきに3回実施しましょう。

○さび病対策

- ・本病は被害茎葉が感染源となり、多湿土壤中で生育初期の感染が多発するとされています。短期輪作ほ場や、過去に発生があったほ場は防除を行いましょう。

小麦の収穫が始まります。

◎水分・塩分補給で熱中症対策。

◎適度な休憩・休息で、農作業事故防止。